伐区の1cm 以下のコジイ以外の広葉樹，例えば，リンボク，アオモジ，カマツカ，ヤブムラサキシキブ，ヤマビワ等の極陽性の樹種が多いことであるがコジイはそれ程多くはない．このような結果からここで行なつたような範囲の施業方法では，林分の成長量については別であるが，コジイの本数については大差が生ずるとは考えられない．コジイは極陽性の木であり多少の保残木があればその成長を抑制し発生本数を減少さす事が可能であると言う説もあるが，昭和30年の調査結果や今度の調査結果からみて，その説に対して疑問を持たざるを得ない．コジイが蓄積の70～90％の高率を占め40年生の完全に閉鎖した保存区（第4区，第5区）において，コジイの1cm～5cmの小径木は少ないが1cm以下の実生樹と推定される極小径木が非常に多く，第4区では13,100本，1cm 以下の全本数の33％，5区では7,100本，22％も占めている．耐陰性の少ないと言われているコジイが，このように天然生の壮令広葉樹林の地表植生として優勢であることは，コジイの実生は陽光が少ないのに対して成長はしないが相当の耐久力を持つていることを意味するのではないかと考える．

參　考　文　献

1　小幡　進　　薪炭林樹種改良試験地（長崎県西彼杵郡大瀬戸町）の調査，研究報告第1報
—とくにカシ類とツブラジイ（コジイ）の生育について—林業試験場研究報告第106号1958．3月．

45.　林種転換の遅れた農民的利用林野の一例

広島県双三郡布野村の一部落の実態調査報告

農林省林業試験場九州支場　　細　井　　守

農家が所有する林野の林種転換が進まない原因は色々考えられるが，一般には農家に植林する労力と資力と意欲の3つがないのが主な原因である事は言う迄もないが，しかしながら，植林をする事が1時的にでも生産基盤を縮少するため収入の減少を強く農家に感ぜしめるような農民的林野の利用形態の種類やその組合せが根本的な阻止原因ではないかと考える．農民的な粗放な林野利用形態の中でも，薪炭の生産，放牧特殊林産物の生産は収益も比較的高く，しかも投下労働や資本をほとんど必要とせず，切替畑，木場作，採草地等の利用方法よりも，林種転換に対して強く抵抗し，農家自体でこの利用方法を変向するのは非常に困難であるのが普通である．筆者は道路は早くより通じているが，木材の用途の拡大前に林野の利用方法を薪炭の生産，放牧の2本に限定した．林種転換の遅れた部落を昭和34年8月に訪づれる機会を得たので，その実態を報告する．

調査部落のあらまし　調査した部落は広島県と島根県との境いの双三郡の布野村の最北端の県境に近い所にある横谷地区の中瀬，中郷，瀬戸の3部落である．この部落の中央には明治20年に完成した国道広島～松江線があるが，それ以前からも山陰，山陽を結ぶ重要な交通の要地であり，布野村は宿駅があつた．この部落は中国山脈沿いの背陵部にあるため積雪降雨共に比較的多く特に調査部落のある横谷地区に最北部にあるため寒冷である．土地は植壌土で地味は良好で，クリナラ，クヌギ，その他広葉樹が多く全面積の92％が森林原野である．役肉牛の飼育が盛んで，米は全農家とも一応自給が可能で，林産物，米，仔牛以外の販売作物はない．調査は全農家53戸に対し調査票により行なつた．その中，調査不能の11戸を除く42戸の農家について集計した結果を報告する．

調査全農家の経営地の内訳けは次の表のとおりである．又耕地，林野の移動は極めて僅かである．

	田	畑	採草地	宅地	林野（放牧地を含む）	合計
面積	町 27.2	2.6	0.2	1.5	379.5	町 411.0
百分率	% 7	1			92	% 100

寒冷な為に田の98％は1毛作田である．家族人員は1戸平均5人で農業従事者数は2人，農業補助1人で合計3人で，耕地の所有規模は平均7反で5反～1町

が一番多く，林野は平均9町（38戸）で5町～20町が一番多く，専業農家は42戸中25戸，兼業14戸その中農業主が11戸，農業従が3戸である．所有形態は小作農が1戸，自小作は5戸その他は全部自作農である．家屋等の建築物は明治時代のものが多く，動力耕転機は5台入つている．販売農産物は水稲264石，役肉牛29頭のみである．林野面積の80%が放牧地を含む薪炭林で，用材林が10%，採草地が10%であり，用材林の75%はスギ，ヒノキの人工林で25%がマツの天然林であり，薪炭林は25年生以下が90%以上を占め既開発林が多い．スギ，ヒノキは10年以下が83%で，最近植林された幼令林が大部分で，マツは20年以上が97%を占めている．人工林率が10%～20%の農家が8戸で，その他は全部10%以下で人工林を全然持たない農家が7戸もある．全農家について見れば，最近毎年3～4町の植林を行なつている．全農家が林野から草を刈つており，39戸の農家が牛を飼育し，春と秋の農繁期に牛を林野に放牧している．過去5年間に立木を販売した農家は半分以下の19戸で合計石数6,000石で薪炭材が6割を占め用材の主なのは天然生のマツ林である．自営製炭を含む自家用の薪炭材を収穫したのは，30戸でその石数は11,316石で立木販売量の2倍に達している．木炭は重要な産物で最近減少しているが，それでも42戸中27戸が生産し，平均1年の生産額は7,700俵でその中15戸が自営製炭で総生産量の約半分を生産している．製炭者は耕地，林野を相当広大に所有する農家も従事している．

この部落が広大な林野を如何に粗放な取扱いをし，林野が低い生産力しか持たないかと言う事は，過去5年以内に毎年林野から10万円以上の直接的な収穫をあげていると推定される農家は僅か2戸で2万円以下が22戸で1町当りの収穫高5,000円以下が30戸で，大部分である事によつても分る．又現在の立木を評価して見ると，1町当り5万円以上の立木蓄積を持つている農家は僅かに2戸で3万円以下の農家が全体の3分の2以上を占めている．又この林分を如何に過度に収奪しているかは，平均1年の収穫量が現在蓄積の20%以上が10戸もあり，最大94%のほとんど収穫してしまつた農家もあり，5%以下の適度の収穫をしている農家は30町以上の大所有者に限られている事によつても推察する事が出来る．このような過度の収穫は，農家の家計のしわよせが林野にかかり完全に農業に従属した為の結果と考えられるが，反面これらの農家が今日迄経営地を手離す事もなくきたのは林野のお蔭げとも考えられる．又この部落は山間避地にありながら昔から山陰山陽の交通の要路に当る．街道筋の部落であり，木材の価値の低い頃から貨幣経済に巻き込まれ，木炭，仔牛等の高品生産を行ない，都市との結びつきが強く，都市の急速な発達と共に労働力が吸収され，労働力の不足が林野を粗放な利用方法へと追いやり，その悪循環の中に今日迄経過し，資本の蓄積が出来ず，全く集約化の機会はなかつたと考えられる．農林業よりの現金収入を推定して見ると平均13万円前後で，相当大きい林野面積を持つ農家としては非常に少ない．以上はこの部落の置かれた位置を外面的からの観察であり，内面的には労働人口を都市に排出してきたため，主食の完全自給が可能であり，農家の経営地の生産性向上に対する熱意がなく，その上農業に従属した粗放な林野利用形態を改革する事による，収入減に耐える資力と勇気がなかつた事が大きな原因と考えられる．これらの農家は現在，用材林の収益の増大，薪炭原木の減少，薪炭の需要の減少，価格の低落等と共に自己の生活水準の引上げるため止むを得ず林野の利用形態を変え，生産力の大なる樹種を植林しようと努力しているが，労力，資力に問題がありその速度は極めて遅い．

この部落の農家のように部落又は農家の歴史的な背景のもとに生みだされ，確立された粗放な林野利用形態を農家自体で変革する事は困難な場合が多く，このまま放置すれば林野を手離さざるを得ないような情勢にあるから，国家の農業政策の一環として一刻も早くこれらの農家の所有する林野の生産力を増大するような政策を樹立する必要がある．